郡市医師会だより

# 北見地域の医療問題を考える会 開催される

北見医師会理事
北海道医報通信員　小野寺　栄　司

国の経済財政改革の基本方針（骨太方針）2006・2007に伴い、医療の分野においても財政の論理で医療制度の改革（改悪）が進められております。大多数の国民はこれらの改革の詳細を知らないまま事が進行しており、気が付いた時には医療が危機的で取り返しのつかない状況に陥っていることが懸念されます。

そこで私たち北見医師会は現在の北見地域の抱える医療問題について広く市民に提起し、医療提供側ばかりでなく患者・家族・市民そして行政の立場からの意見表明の場を設け、3者の相互理解と共通の認識に立った上でのより良い医療の姿を探ることを目的として、また地域住民に対して現在の危機的状況を発信する機会とすべく、『地域における医療のあり方フォーラム“北見の医療と介護を考える”』を企画しました。

この北見医師会主催（北見市共催）の市民フォーラムは今年9月5日午後6時30分より北見市のホテル黒部で市民を含め見通しを上回る350人以上の参加のもと盛大に開催されました。

はじめに、古屋聖兒北見医師会会長はこの会の趣旨と意義を述べ、そして多数の市民の参加に責任の重さを感じる旨の挨拶を行いました。その後に、古屋会長の司会で第一部『北見地域の医療の現状と将来』のテーマで二題の講演が行われました。

最初に私小野寺が基調講演として北見医師会の活動の概略を紹介し、現在の医療の問題点を提起いたしました。『医療崩壊』“患者・家族の皆さんの視点”、“政府の視点”、“医療提供側の視点”として各々の立場からみた現状での日本の医療の問題点について論じました。諸問題の中から“グランドデザイン2007（日本医師会）”での国民の求める医療に関するアンケート調査で順位の高かった救急医療体制と医療機関の機能分化と役割分担について、国の考え方、医療提供側の考えを紹介いたしました。そして3次医療圏内で完結した医療を達成するためには“かかりつけ医”を中心とした医療資源の有効活用に心掛けることが重要と訴えました。最後に過疎の地方における有床診療所の果たしている役割につき私見を述べさせていただきました。

次いで“地域における北見赤十字病院の現状と将来構想”と題して種市幸二北見赤十字病院副院長が地域医療支援病院として同院が地域医療に果たしている役割と機能、近い将来必要となる新築についての基本理念・構想についての説明が行われました。

質疑応答では医療連携推進のためには患者側・医療提供側・行政の3者の協同が必要であるとの意見が出ました。北見赤十字病院の将来構想については、北見市民にとってホットな問題である北見市役所の移転新築問題とリンクした形で論ずるべきでない、北見の医療安全保障の中核を担う同院の新築に際しては応分の支援が必要である、新築後の運営については透明性を確保し健全財政に心がけていただきたいなどの意見・提言が寄せられました。

次いで第2部の『療養病床再編に伴う地域の医療・介護体制の構築』と題されたフォーラムが大内博文北見医師会理事の司会のもと進められました。

最初に森本典雄北見医師会理事が“北見市における介護難民の推計”と題し、昨年北見

医師会が行ったアンケート調査を基に、2012年に介護療養型医療施設が全廃されると861名の介護難民の発生が推計されることを報告いたしました。そして介護療養病床の受け皿とされる老人保健施設への転換が進んでいない状況と、このまま今回の改革（悪）が強行されると2000年の介護保険法成立の頃から医療・介護に携わり支援してきた医療関係者の厚生労働省そして介護保険制度に対する信頼と支援が失われてしまう危惧があり、その結果慢性期医療の危機・荒廃が懸念されると訴えました。

次いで“療養病床再編―要介護5の母を抱えた家族の立場から”と題して母親を介護療養病床に預けている自営業の男性からの訴えがありました。この中で国は介護療養病床廃止に伴う受け皿は確保するといっているが、過疎の進む地方では一向に基盤整備がなされる気配も無く最悪の場合には母の介護をするために仕事も続けられなくなり家庭崩壊が危惧されると訴えておりました。

北見市からは長尾智美北見市介護福祉課副主幹が“療養病床再編の背景と内容”と題し発表を行いました。ここでは療養病床をめぐるこれまでの経緯、そして『利用者の視点』『費用負担者の視点』『医療提供体制の視点』を総合した見地から療養病床再編が必要となってきた経過の説明がありました。

北見市として現在497床ある療養病床（うち介護保険適用は194床）について、北海道のレベルでは今年秋を目途に圏域ごとの転換推進計画が作成され、その後も平成24年まで毎年度目標が設定され計画達成に向け進んで行く旨の説明がありました。

転換推進計画作成に当たっては計画作成者の道と市町村の協議・調整の機会はありますが、道や市町村など末端の行政にできることは限られており、大きな国の方針には従わざるを得ない現状であると訴えておりました。

次いで討論に移りフロアから国の療養病床再編についての疑問を始めさまざまな意見・提言・要望が寄せられました。それらの発言の要旨を羅列しますと、“療養病床に代わる十分な受け皿が整備されるか疑問である”、“財政の論理で医療や福祉を切り捨て、地方を切り捨てることになるのでは”、“末端の行政機関は国の言いなりにならず地域を守るため、国にものを申してもらいたい”、“市役所と北見赤十字病院の密接な連携を求める”など多くの発言がありました。さらに今回のフォーラムについて、“このような会、意見発表の場を継続して設けていただきたい”、“この会に政策決定者である議員の皆さん（できれば道議、国会議員も）加わっていただき地方の意見を霞ヶ関に届けていただきたい”などこの会に期待する意見が出され、予定時間を超過して会を終了しました。

最後に、フォーラム終了後ある市民の方から“日本の医療がこんなに危機的な状況に陥っているとは知らなかった、本日のフォーラムに来て認識を改めることができて良かった”との感想を聞き、本フォーラム開催が極めて有意義であったことを実感しました。